付き合っていなくても嫉妬する

秋山　知里

（服部　陽介ゼミ）

日常生活において我々は、好きな人には自分のことも好きになってもらいたい、大切な人には自分のことも大切にしてもらいたいと考えることがある。また、好きな人を他の人に奪われたくないという気持ちから、第三者の存在に対し嫉妬感情を抱くことがある。

嫉妬とは、誰しもが経験する対人感情の一つである。坪田・深田（1991）では、嫉妬感情は1）社会的関係における嫉妬、2）社会的比較によって生じる嫉妬に分類されるとし、1）を「特定の他者の既存の望ましい関係が、第三者によって脅かされる時に生じる不快な感情」とし、2）を「何等かの次元（所有物、業績、地位など）において、自分のほうが優位か同等である、あるいはそうあるべきだと思っているにもかかわらず、実際には他者が優位に立っている時に生じる不快な感情」と定義している。本研究で取り扱う嫉妬は恋愛関係における嫉妬感情であるため、1）の、社会的関係における嫉妬に分類される。

嫉妬についての研究では、特に恋愛関係における嫉妬を取り扱う場合が多い。たとえばWhite（1981）は嫉妬の原因の認知について検討し、自尊心への脅威と価値ある関係を失う事への恐れが嫉妬の根源であると考察している。また、White（1981）以降、認知・情動・行動的要素から嫉妬を捉える研究が多く、これらの三次元の観点から嫉妬を測定する代表的な尺度にPfeiffer & Wong（1989）のMultidimensional Jealousy ScaleやBuunk（1997）のJealousy Scaleがある。嫉妬の三次元について、Pfeiffer & Wong（1989）や神野（2016）は、嫉妬の認知的側面はパートナーの裏切りへの認知的な過敏さを、情動的側面は、嫉妬喚起場面で排他的な感情を覚える程度、行動的側面はパートナーを探るような行動や、ライバルを意識した行動を表すと述べている。

恋愛関係における嫉妬感情は恋人との間でのみ生じるものではない。相手に好意を寄せている場合でも、また、その恋が一般的に成就しにくいと考えられる恋愛においても、嫉妬感情が起こりうると考えられる。たとえば、ファンがアイドルや芸能人に本気で交際したいと考えている場合や、アニメキャラクターなどの二次元キャラに恋をしている場合などの身近ではない相手を恋人にしたいケースは、成就しにくいと考えられる恋愛のひとつである。しかしながら、恋愛における嫉妬の研究のほとんどは、恋人のいる、もしくは過去に交際経験のある人を調査対象としているものが多く、上記のような、恋人関係が成立していない関係における嫉妬については、ほとんど研究がされていない。そこで本研究では、恋人のいる人、身近に恋人にしたいと考える相手がいる人、恋人にしたいが、相手が身近におらず恋愛関係になることが難しい相手がいる人を対象に調査を実施し、それぞれの嫉妬の傾向を比較することで、従来の恋愛関係における嫉妬との異同について議論する。

依存の定義と嫉妬との関係

本研究では、嫉妬が恋愛関係における依存とどのように関連するかに注目する。依存の種類は大きく三つに分けられ、アルコールや薬物などの物質の摂取による物質依存、ギャンブルや買い物などの行為のプロセスに依存するプロセス依存、対人関係に依存する人間関係依存がある（岩崎、1999；信田、2000）。人間関係依存は、互いに支え合いポジティブな相互作用をもたらす「よい依存」と、自身の安心のために他者をコントロールしようとし、結果苦しむことになる「悪い依存」に分けられる。発達段階にふさわしい「よい依存」に対し、「悪い依存」は依存が未熟で、前思春期を過ぎても、支え合うという対等で親密な関係で示される成熟した依存を展開できないため、相手

にしがみつくことで、こころの安心を確保しようと図ることから（渡辺、2002）、相手との関係に介入する第三者の存在に、より過敏になると考えられる。また、Gurrero and Andersen（1998）は、相手との関係に時間や労力を多くつぎ込むことによって情緒的依存が増加し、それによって嫉妬も高まると述べている。このことから、人間関係依存が強いほど、嫉妬も強まると予測される。

恋愛依存は人間関係依存の一つであるため、同様に、恋愛依存が強いほど嫉妬が強まると考えられる。なお、恋愛依存は目に見える統一された症状があらわれない場合が多く、定義や用語は各研究者によって異なるが、本研究では、Mellody（1992）による恋愛依存者の行動、特徴をもとに定義づけされた、伊福・徳田（2006）の「一人でいることやパートナーがいないことに耐えられず、恋愛関係・親密な友人関係にある異性に過度に執着・依存しその人のために尽くす、あるいは見捨てられることを恐れ自己犠牲的な行動をとっている状態」を、本研究における恋愛依存の定義とする。

以下に、本研究における仮説を示す。

仮説1　恋人がいる人では、既に親密な関係性が成り立っていることから、相手に対して無条件的な受容や愛情を求める依存傾向が強くても、嫉妬は強まらないと予測される。身近に恋人にしたいと考える相手がいる人では、相手に対して無条件的な受容や愛情を求める依存傾向が強いほど嫉妬が強まると予測される。恋人にしたいが相手が身近におらず恋愛関係になることが難しい相手がいる人でも同様に、相手に対して無条件的な受容や愛情を求める依存傾向が強いほど嫉妬が強まると予測される。

仮説2　恋人がいる人では、既に親密な関係性が成り立っていることから、相手のことを心の支えとする依存傾向が強くても、嫉妬は強まらないと予測される。身近に恋人にしたいと考える相手がいる人では、相手のことを心の支えとする依存傾向が強いほど、嫉妬が強まると予測される。恋人にしたいが相手が身近におらず恋愛関係になることが難しい相手がいる人でも同様に、相手のことを心の支えとする依存傾向が強いほど、嫉妬が強まると予測される。

仮説3　身近に恋人にしたいと考える相手がいる人では、相手を恋人にしたいと強く考えているほど、依存が強まると予測できる。恋人にしたいが相手が身近におらず恋愛関係になることが難しい相手がいる人でも同様に、恋人にしたいと強く考えているほど、依存が強まると予測される。

仮説4　身近に恋人にしたいと考える相手がいる人では、相手を恋人にしたいと強く考えているほど、嫉妬が強まると予測できる。恋人にしたいが相手が身近におらず恋愛関係になることが難しい相手がいる人でも同様に、恋人にしたいと強く考えているほど、嫉妬が強まると予測される。

方　法

調査対象者

調査参加者は、京都の大学生および17歳から74歳の男女208名（男性133名、女性73名、その他3名、平均年齢20.48歳、*SD*=4.45）であった。そのうち不備のある8名の回答と、18歳～23歳に該当しない9名の回答者を除いた191名（男性120名、女性70名、その他2名、平均年齢19.83歳、*SD*=1.38）を分析対象者とした。

調査期間

2020年7月－9月であった。

尺度

1. 恋愛依存傾向尺度

伊福（2006）が作成した「恋愛依存傾向尺度」を用いて、調査対象者の依存の傾向を測定した。この尺度は恋愛場面での異性に対する依存性を測定するものであり、4つの下位尺度から合計19項目により構成されている。「無条件的愛情希求」は「彼（彼女）は、私だけのものであってほしい」など、相手に対し無条件的な内容や愛情を求める度合いを、「パートナーの心理的支え」は「彼氏（彼女）は心の支えになっている」などの、相手と付き合う中で色々なことをがんばることができたり、元気が出たりなど、相手の存在によって自身の成長や向上をはかる事ができる度合いを、「パートナー中心的態度」は「体調が悪くても、彼（彼女）に呼び出されたら出掛ける」などの、

自身よりも相手のことを優先させ、中心とする度合いを表す。「孤独への恐れ」は「一人でいるとたまらなく不安になる」などパートナーとなる相手がいないことへの寂しさや一人でいることに対する不安、自身への無価値感などの度合いを表す。

教示文は“さきほどの質問で想像してもらったXさんについて、以下の質問をします。現在のあなたの心境について、最も適当だと思う番号にチェックを入れてください。”とし、項目内容について、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。なお、本研究では恋人、もしくは恋人にしたいと考えている人物をXさんとして項目の回答を求めたことから、各項目の「彼（彼女）」を「Xさん」に置換したものを使用した。

2. 多次元恋愛関係嫉妬尺度

神野（2016）が作成した「多次元恋愛関係嫉妬尺度」を用いて、調査対象者の嫉妬傾向について測定した。この尺度は恋愛関係における嫉妬の度合いを多次元的に測定するもので、3つの下位尺度から合計15項目により構成されている。「猜疑的認知」は「誰かにXさんをとられるかもしれないと考えることがある」など、Xさんが第三者に奪われることの認知的な過敏さを表す。次に「排他的感情」は「Xさんが誰かといちゃいちゃしていたら、不機嫌になる」などの親密な関係に第三者が侵入してくることへの否定的感情の強さを表す。最後に「警戒行動」は「Xさんに、だれと何をしていたのか、何を話していたのかを聞くことが多い」などの親密な関係に第三者が侵入してこないよう警戒し、行動を詮索する度合いを表す。項目内容について、「1. 全く当てはまらない」－「7. 非常に当てはまる」の7件法で回答を求めた。

手続き

グーグルフォーム上で、質問への回答を求めた。調査対象者に、性別、年齢、母国語について回答を求めた。次に、“あなたが現在お付き合いしている、もしくは恋人にしたいと考えている人物を「Xさん」とします。Xさんの性別（同性・異性）は問いません。また、Xさんは、架空の人物（芸能人、歴史上の人物）でも構いません。これからXさんについて質問をします。あなたの心境に一番近いものにチェックをいれてください。”と教示し、Xさんと対象者が恋人同士であるか回答を求めた。

Xさんと恋人同士であると回答した場合には、“あなたが現在お付き合いしているXさんについて質問します。あなたの心境に一番近いものにチェックをいれてください。”と教示し、「Xさんとどれくらい関係を維持したいと考えているか」について、「維持したくない」から「絶対に維持したい」の10件法で求めた。次に、「Xさんとどれくらい関係を維持できると考えているか」について、「維持できる」から「絶対に維持できる」の10件法で回答を求めた。

Xさんと恋人同士ではないと回答した場合には、“あなたが現在、恋人にしたいと考えているXさんについて質問します。あなたの心境に一番近いものにチェックをいれてください。”と教示し、回答者にとってXさんはどの立場にあたる人なのかを、「1. 友人」「2. 仕事場の人（アルバイト先含む）」「3. 趣味の活動で知り合った人」「4. 芸能人（俳優、ミュージシャン、アイドルなど）」「5. 架空の人物（アニメキャラクター、ゲームの登場人物など）」「6. その他」の6件法で回答を求めた。次に、「Xさんと恋人になりたいと、どれくらい強く考えているか」について、「恋人にしたくない」から「絶対に恋人にしたい」の10件法で回答を求め、「Xさんを恋人にできると、どれくらい強く考えているか」について、「恋人にできない」から「絶対に恋人にできる」の10件法で回答を求めた。また、「6. その他」と回答した場合には、記述式でどのような人なのかを求めた。

その後、対象者に、恋愛依存傾向尺度、多次元恋愛関係嫉妬尺度への回答を求めた。これらの質問の順序はすべて固定されていた。

結　果

データの除外と分析方法

質問項目に記入ミスのあった8名分のデータおよび年齢が18-23歳に該当しない9名分のデータを除いて分析を行った。

なお、分析は清水（2016）のHAD Version17.10を用いた。

想起する人物について

想起した人物である「Xさん」を恋人であると回答した対象者を、「恋人群」と命名した。つぎに、恋人でないと回答した対象者のうち、Xさんが「1.友人」「2.仕事場の人（アルバイト先含む）」「3.趣味の活動で知り合った人」と回答した対象者を、意中の相手が実在し、手が届きやすい存在であることから「実在群」と命名した。それに対し、Xさんが「4.芸能人（俳優、ミュージシャン、アイドルなど）」「5.架空の人物（アニメキャラクター、ゲームの登場人物など）」と回答した対象者は、意中の相手が架空の人物か、恋愛関係になることが非常に困難な存在であることから、「架空群」と命名した。

また、「6.その他」と回答した対象者は、自由記述の回答内容から、「実在群」と「架空群」のいずれかに分類した。

各尺度の因子構造についての分析

まず、恋愛依存傾向尺度、多次元恋愛関係嫉妬尺度についてそれぞれ探索的因子分析を行った。その結果、多次元恋愛関係尺度は、先行研究である神野（2016）とおおむね一致した因子構造が得られた。その一方で、恋愛依存傾向尺度については、先行研究である伊福（2006）と大きく異なる因子構造が確認された。以下に、尺度ごとに因子分析の結果をまとめる。

恋愛依存傾向尺度　全19項目に対して最尤法による因子分析を行った。先行研究にもとづき4因子を仮定した最尤法・Promax回転による因子分析を行ったところ、先行研究の因子構造と大きく異なる結果が得られた。先行研究では「無条件的愛情希求」因子に含まれていた項目である「もしもXさんと別れたり離れたりすることがあったら、私は生きていけないと思う」「Xさんなどのパートナーがいないときには何もやる気が無くなる」が、本研究では「孤独への怖れ」因子に負荷していた。また、先行研究では「パートナー中心的態度」因子に含まれていた項目である「Xさんのことばかり考えて、他の事が手につかなくなる」が、本研究では「孤独への怖れ」因子に負荷していた項目である「Xさんと親しくなることに、不安を感じる」「Xさんとはどこか距離を置いて接してしまう」が、本研究では十分な因子負荷量を示さなかった。そこで、本研究では十分な因子負荷量を示さなかった項目を分析から除外し、残りの17項目に対し、再度最尤法・Promax回転による因子分析を行い、得られた4因子を扱うこととした。先行研究にもとづいて、第1因子を「孤独への怖れ」（パートナーとなる相手がいないことにより寂しさや一人でいることに対する不安、自身に無価値感を感じること）、第2因子を「無条件的愛情希求（以下、愛情希求）」（相手に対し無条件的な受容や愛情を求めること）、第4因子を「パートナーの心理的支え（以下、心理的支え）」（相手の存在によって自身の成長や向上をはかる事ができること）と命名した。第3因子は、「体調が悪くても、Xさんに呼び出されたら出掛ける」「自分に用事があっても、Xさんに呼び出されたらかけつける」といったパートナーに対する献身的な態度がみられる項目が見られたことから、本研究では「献身的態度」と命名した。それぞれの下位尺度についてα係数を算出し、内的一貫性についての検討を行った。その結果、最も小さい値を示した下位尺度「パートナーの心理的支え」因子でもα=.74を示し、十分な内的一貫性があることが確認された。回転後の最終的な因子パターンと因子間相関、各下位尺度のα係数を表1に示す。

多次元恋愛関係嫉妬尺度　全15項目に対して最尤法による因子分析を行った。先行研究にもとづき3因子を仮定した最尤法・Promax回転による因子分析を行ったところ、先行研究では「排他的感情」因子に含まれていた項目である「Xさんが誰かに対してとても愛想よく微笑んでいたら不機嫌になる。」が、本研究では複数の因子に負荷する結果が得られたため、分析から除外した。それぞれの下位尺度についてα係数を算出した結果、最も小さい値を示した下位尺度「警戒行動」因子でもα=.87を示し、十分な内的一貫性があることが確認された。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関、各下位尺度のα係数を表2に示す。

表１　恋愛依存傾向尺度項目 因子分析結果

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
第1因子　孤独への怖れ(α = .83)				
Xさんなどのパートナーがいないときには何もやる気が無くなる	**.832**	-.119	.040	-.027
Xさんなどのパートナーがいないという寂しさに耐えられなくなる	**.740**	.315	-.251	.010
もしもXさんと別れたり離れたりすることがあったら、私は生きていけないと思う	**.716**	-.177	.162	.075
Xさんなどのパートナーがいない自分には価値がないと思うことがある	**.660**	-.173	.006	.065
一人でいるとたまらなく不安になる	**.487**	.195	.030	.007
Xさんのことばかり考えて、他の事が手につかなくなる	**.427**	.283	.002	-.022
第2因子　無条件的愛情希求(α = .78)				
Xさんには、いつも私のことだけを考えてほしい	.014	**.855**	.089	-.263
Xさんには、常に私を認め受け入れて欲しい	-.157	**.692**	.034	.237
Xさんは、私だけのものであってほしい	.024	**.675**	-.034	.057
Xさんには、どんなことにでも私の味方になってほしい	-.112	**.512**	.022	.209
第3因子　献身的態度(α = .81)				
体調が悪くても、Xさんに呼び出されたら出掛ける	-.112	-.016	**.832**	.009
Xさんとの時間を何より優先させ、そのため自分の時間がなくなっても構わない	.184	.136	**.660**	-.048
自分に用事があっても、Xさんに呼び出されたらかけつける	.087	.048	**.652**	.042
第3因子　パートナーの心理的支え(α = .74)				
Xさんは心の支えになっている	.082	-.080	-.051	**.788**
Xさんのことを思い浮かべて元気を出すことがある	.009	.000	-.020	**.615**
Xさんと付き合う中で色々なことをがんばれる	-.003	.168	.081	**.602**
私が間違ったことをしている時には、Xさんにはっきり注意してほしい	.047	.035	.040	**.455**

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	―	.518	.446	.396
Ⅱ		―	.523	.428
Ⅲ			―	.269
Ⅳ				―

表２　恋愛嫉妬傾向尺度項目 因子分析結果

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2
第1因子　猜疑的認知(α = .91)				
誰かにＸさんをとられるもしれないと考えることがある。	**.891**	.044	-.163	.733
Ｘさんが、自分を置き去りにして誰かのもとへいってしまうのではないかと思うことがある。	**.826**	.031	.022	.736
Ｘさんが、誰か他の人に魅力を感じているかもしれないと思うことがある。	**.821**	-.003	-.052	.633
Ｘさんが誰かに夢中になっているのではないかと思いがちである。	**.799**	-.059	.123	.674
自分の知らないうちに、誰かがＸさんを誘惑しているのではないかと思うことがある。	**.740**	-.041	.127	.605
第2因子　排他的感情(α = .91)				
Ｘさんが誰かといちゃいちゃしていたら、不機嫌になる。	-.072	**.994**	.022	.920
誰かがXさんとデートしていたら，嫌な気持ちになる。	-.009	**.860**	.045	.776
誰かがＸさんが誰かに寄り添って楽しそうにしていたら不機嫌になる。	.306	**.570**	-.026	.633
誰かがＸさんに対して恋愛感情を持っていると知ったら、不愉快になる。	.304	**.504**	.069	.621
第3因子　警戒行動(α = .87)				
Ｘさんに、誰と何をしていたのか、何を話していたのか聞くことが多い。	.015	-.132	**.986**	.852
Xさんにどこへ行くのか，何を話していたのかを聞くことが多い。	-.070	.106	**.800**	.692
Ｘさんにかかってきた電話が、誰からの送信だったのかを聞くことがある。	.034	.054	**.721**	.594
もし自分が転んで怪我をすることを想像したら，実際に転んで怪我をする危険性が高まる.	.025	.011	**.658**	.458
Ｘさんに、過去や今の恋愛関係についていろいろと聞くタイプである。	-.008	.083	**.566**	.376

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	―	.686	.465
Ⅱ		―	.571
Ⅲ			―

各変数の相関分析

群ごとに、恋愛依存傾向尺度、多次元恋愛嫉妬尺度のそれぞれの下位尺度との相関係数を算出した。結果を表3に示す。

恋愛依存傾向尺度の下位尺度「愛情希求」と、多次元恋愛嫉妬尺度の各下位因子との相関係数を算出した。「猜疑的認知」との相関係数は、恋人群が *r*=.178、実在群が *r*=.574、架空群が *r*=.649 であり、実在群と架空群に有意な正の相関がみられた。「排他的感情」との相関係数は、恋人群が *r*=.472、実在群が *r*=.664、架空群が *r*=.652 であり、各郡において有意な正の相関がみられた。「警戒行動」との相関係数は、恋人群が *r*=.230、実在群が *r*=.322、架空群が *r*=.547 であり、実在群と架空群に有意な正の相関がみられた（ps<.05）。以上の結果から、仮説1は一部支持された。

恋愛依存傾向尺度の下位尺度「心理的支え」と、多次元恋愛嫉妬尺度の各因子との相関係数を算出した。「猜疑的認知」との相関係数は、恋人群が *r*=.445、実在群が *r*=.519、架空群が *r*=.252 であり、実在群と架空群に強い正の相関がみられた。「排他的感情」との相関係数は、恋人群が *r*=.394、実在群が *r*=.541、架空群が *r*=.264 であり、実在群にのみ有意な正の相関がみられた（ps<.05）。「警戒行動」との相関係数は、恋人群が *r*=.183、実在群が *r*=.541、架空群が *r*=.132 であり、実在群にのみ強い正の相関がみられた（p<.05）。以上の結果から、仮説2は支持されなかった。

実在群と架空群の、「相手を恋人にしたいとどれくらい強く考えているか（以下、恋人にしたい）」「相手を恋人にできるとどれくらい強く考えているか（以下、恋人にできる）」という、相手との関係への期待を表す変数と多次元恋愛嫉妬尺度および恋愛依存傾向尺度の下位尺度との相関係数を算出した。各変数間の相関係数を表4に示す。

「恋人にしたい」と「孤独への怖れ」との相関

表3　各尺度間の相関係数

恋人群

	1	2	3	4	5	6
1.孤独への怖れ						
2.愛情希求	.220 +					
3.献身的態度	.296 *	.369 **				
4.心理的支え	.246 *	.089	.061			
5.猜疑的認知	.482 **	.178	.445 **	.075		
6.排他的感情	.562 **	.472 **	.394 **	.285 *	.504 **	
7.警戒行動	.154	.230 +	.183	-.042	.157	.163

実在群

	1	2	3	4	5	6
1.孤独への怖れ						
2.愛情希求	.543 **					
3.献身的態度	.550 **	.666 **				
4.心理的支え	.470 **	.550 **	.583 **			
5.猜疑的認知	.665 **	.574 **	.519 **	.487 **		
6.排他的感情	.602 **	.664 **	.541 **	.575 **	.746 **	
7.警戒行動	.366 **	.322 **	.243 *	.202 +	.477 **	.497 **

架空群

	1	2	3	4	5	6
1.孤独への怖れ						
2.愛情希求	.577 **					
3.献身的態度	.597 **	.494 **				
4.心理的支え	.339 *	.437 **	.351 *			
5.猜疑的認知	.297 +	.649 **	.252	.377 *		
6.排他的感情	.406 *	.652 **	.264	.318 +	.873 **	
7.警戒行動	.171	.547 **	.132	.252	.854 **	.775 **

** p < .01, * p < .05, + p < .10

表4　Xさんとの関係への期待と各下位尺度の相関係数

	実在群		架空群	
	恋人にしたい	恋人にできる	恋人にしたい	恋人にできる
孤独への怖れ	.398 **	.129	.390 *	.273
愛情希求	.399 **	.097	.649 **	.350 *
心理的支え	.430 **	.189 +	.524 **	-.003
献身的態度	.519 **	.275 *	.430 **	.138
猜疑的認知	.412 **	.048	.655 **	.335 *
排他的感情	.441 **	.149	.635 **	.483 **
警戒行動	.119	.062	.505 **	.340 *

** p < .01, * p < .05, + p < .10

係数は、実在群がr=.398、架空群がr=.390であり、双方に弱い正の相関がみられた（ps<.05）。「愛情希求」との相関係数は、実在群がr=.399、架空群がr=.649であり、双方に有意な正の相関がみられた（ps<.05）。「献身的態度」との相関係数は、実在群がr=.519、架空群がr=.430であり、いずれも有意な正の相関がみられた（ps<.05）。「心理的支え」との相関係数は、実在群がr=.430、架空群がr=.524であり、実在群、架空群ともに有意な正の相関がみられた（ps<.05）。以上の結果から、仮説3は支持された。

「恋人にしたい」と「猜疑的認知」との相関係数は、実在群がr=.412、架空群がr=.655であり、いずれも有意な正の相関がみられた（ps<.05）。「排他的感情」との相関係数は、実在群がr=.441、架空群がr=.635であり、有意な正の相関がみられた（ps<.05）。「警戒行動」との相関係数は、実在群がr=.119、架空群がr=.505であり、架空群にのみ有意な正の相関がみられた（p<.05）。以上の結果から、仮説4は一部支持された。

考　察

本研究は、恋人がいる人、身近に恋人にしたいと考える相手がいる人、恋人にしたいが相手が身近におらず恋愛関係になることが難しい相手がいる人を対象に、それぞれの嫉妬の傾向を比較することを目的とした。

恋愛依存と嫉妬の相関を比較したところ、実在群、架空群には「愛情希求」因子と嫉妬の各因子に強い正の相関がみられ、恋人群は「排他的感情」因子のみ、正の相関がみられた。この結果は、パートナーの有無が影響を与えたと考えられる。意中の相手が恋人である恋人群では、自分の味方であり、受け入れてくれるという親密な関係性が既に成り立っている関係であることで、相手を疑う気持ちや第三者の存在を警戒する傾向が弱まったのではないかと考えられる。

恋人群と実在群に「心理的支え」因子と「猜疑的認知」、「排他的感情」因子に正の相関がみられたのに対し、架空群には相関がみられなかった。これは、意中の相手との関係性における進展に対する期待が関係しているのではないかと考えられた。たとえば、「相手を恋人にしたいとどれくらい強く考えているか」という質問項目への回答について群ごとに平均値を算出すると、実在群の平均値が6.05であったのに対し、架空群の平均値は5.40であった。一方、「相手を恋人にできるとどれくらい強く考えているか」という質問項目への回答について群ごとに平均値を算出すると、実在群の平均値が4.00であったのに対し、架空群の平均値は2.08と、実在群と架空群で「恋人にしたい」と「恋人にできる」という相手との関係の期待に明確な差がみられた。架空群の想起する意中の相手は、恋人にしたいと思う傍らで、あくまでも観客を相手に舞台人としてパフォーマンスをする立場であり、個人的な関係を望みにくいという意識があると考えられる。そのため、意中の相手が心理的支えと感じるという、ポジティブな依存と嫉妬との相関はみられなかったのではないかと考えられた。

実在群、架空群の「相手を恋人にしたいとどれくらい強く考えているか」という相手との関係の期待値と、嫉妬と依存の各因子との間に同程度の高い正の相関がみられた。ただし、「警戒行動」因子については、実在群では相関がみられなかったのに対し、架空群では高い正の相関がみられた。これは、実在群の意中の相手が身近な存在であり、なおかつ意中の相手を取り巻く関係性が目視可能な環境であることから、嫉妬感情を抱いた場合でも慎重な行動をとることができるのではないかと考えられた。一方、架空群は意中の相手が物理的・心理的にも遠い位置にあることや、相手を取り巻く関係性について、SNSなどのメディアから自分の意志で情報を入手しなければいけない環境にあるために、嫉妬感情を抱いた際には警戒行動が強まる傾向があるのではないかと考えられた。

引用文献

Buunk, B. P.（1997）. Personality, birth order and attachment styles as related to various types of jealousy. *Personality and Individual Differences, 23,* 997-1006.

Guerrero, L. K., & Andersen, P. A.（1998）. Jealousy experience and expression in romantic

relationships. In P. A. Andersen & L. K. Guerrero (Eds.), *Handbook of communication and emotion: Research, theory, applications, and contexts* (p.155-188). Academic Press.

深田博己・坪田雄二（1990）．恋愛関係における嫉妬の研究　広島大学教育学部紀要 第Ⅰ部，38，207-211.

伊福麻希・徳田智代（2006）．恋愛依存傾向尺度作成の —男女間における恋愛依存傾向の比較— 久留米大学心理学研究，5，157-162.

岩崎 正人（1999）．ラブ・アディクション　恋愛依存症　五月書房

神野 雄（2016）．多次元恋愛関係嫉妬尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　パーソナリティ研究，25，86-88.

Melody, P., & Wells, M. A. (1992). *Facing love addiction: Giving yourself the power to change the way you love*. San Francisco, CA：Harper San Francisco.

信田 さよ子（2000）．依存症　文芸春秋．

Pfeiffer, S. M., Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships, 6,* 181-196.

清水裕士（2016）．フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究，1，59-73.

坪田雄二・深田博己（1991）．嫉妬感情に関する実証的研究の動向　広島大学教育学部紀要 第Ⅰ部　39，167-173.

渡辺 登（2002）．よい依存，悪い依存　朝日新聞社

White, G. L. (1981). Jealousy and partner's perceived motives for attraction to a rival. *Social Psychology Quarterly, 44,* 24-30.